

## 编者から見る『中日大辞典』

今泉潤太郎

〈愛知大学名誉教授、前中日大辞典編纂所所長〉

皆さん、こんにちは。今泉です。最近ぼけてきまして言葉がはっきりしませんので——もともとぼけてたのですが（笑）——お許してください。今、学長からも、それから総領事からもふれられたところですが、この辞典は1933年生まれです。私は32年生まれですからもう昨日のこのようにちゃんと覚えています。昭和8年(1933)に上海の東亜同文書院(以下、同文書院)でこの辞典は編集が始められました。

### 東亜同文書院の華語研究

〔スクリーンの南開大学における辞典座談会の写真を指して〕こちらが鈴木擇郎先生です。鈴木先生は中国語の教員として二十数年間同文書院で中国語を教えられました。同文書院のいわば中国語の最も完成された教育研究の時期に、実施者といいましょるか、華語研究会のリーダーで、この先生のもとに同文書院は当時、日本人の中国語の教員が10名程度と同数の中国人スタッフを抱えていました。鈴木先生がリーダーとなって「華日辞典」「華語」というのがその当時中国語の学問的といいま



しょうか、一般的な用語です。中華の華です。現在はわれわれは「中国語」と言っていますが、これは非常に漠然とした言い方で、中国でも中国語という言い方は普通はなくて「漢語」といいます。漢民族の言葉の漢語です。漢語というと日本ではあまり通用しません。大正から昭和初期にかけては華語です)、この辞書を作る発意をします。

同文書院は先ほど言ったように中国語の面で非常に豊富な人材を抱えておりました。かつ同文書院は言うまでもなく20世紀の初頭に上海にできた。中国の実情(当時は清国ですが、日本は明治の頃ですね)に通じて、日清間の貿易、通商を盛んにしようという、非常に実学的、実務的な専門学校として誕生します。今でいう商学、経済学です。現地の中国人と日本人がじかに貿易、通商を行うというのは当時は大変困難でした。外国との取引はほとんどが買弁という中国の職業的に外国との貿易を行う人たちに牛耳られており、なおかつ欧米の資本が中国を広大な商圏として確保していました。それに割り込むかたちで日本の商業資本が進出するわけです。ですから、欧米の貿易商社と肩を並べ、かつ中国の買弁、中国の専門的なギルドの中に割って入るという、非常に重い役割を負わされていた。それを同文書院はやろうという、そういう志があったわけです。したがって中国語は必須の科目でした。当時の日本は、東京あるいは大阪に外国語学校というのがありましたが、そのレベルと比べてはるかに高い、何よりも中国の現地で中国語を中国人のスタッフから学ぶ、24時間、朝から晩まで同じキャンパスの中で中国語を学びますので、非常に進歩も速く、なおかつ実践的な語学教育でした。そのような同文書院ですので、華日辞典を作るということはいわば必然でありました。

当時日本では、皆さんはほとんど記憶もないと思いますが、小型の、ポケット版の『井上中国語辞典』という辞書がありました。それ以外はほとんどが辞書の名に値しないようなものです。ところで中国のほうはどうかといいますと、これまた中国はもともと古典を重んじるので、現代語、つまり今生きている人間がしゃべる言葉についての関心はゼロに近いわけです。それを研究しよう、学問の対象としようという考えは論外です。したがって中国

自体、1930年代になって初めて国語研究を行うわけです。ですから、日本も中国も含めて現代中国語の研究は非常にレベルが低かった。例えば日本ではすでに英和辞典はもちろんのこと、独和辞典とか、あるいは仏和辞典とかでも、大辞典に値するような優れた辞書がありました。中国語はポケット版の辞書しかないのに、英語とかドイツ語、フランス語は、ロシア語もそうですが、レベルが高かったわけです。そういう中で同文書院の華日辞典作りというのが始まるわけです。

『中日大辞典』は昭和8年(1933)から辞典作りが始まりました。この華日辞典を引き続いて愛知大学で完成させたと言っていますが、実態はそうではありません。実はこの華日辞典の原稿は同文書院が廃校となり、なくなってしまいます。つまり日本がこの前の戦争で敗れて、中国にあった同文書院は一切の財産が、この辞典の原稿も含めて、中国政府に接収されるわけです。接収ということはつまり取られてしまう、負けた国は勝った国に全部、領土も人も財産も取られるわけです。日本は中国に行って中国のものを取った、だからそれを中国に戻した、結果的にはそうなるわけですが、この中に今言った華日辞典の原稿(これは1枚1枚のカードにそれぞれ中国語の単語を書きまして、それに対する発音、それから説明その他を書いてはカードボックスに入れる。やがてそれが一つの方針のもとに、つまり辞典の凡例はんれいですが、これによって整理されてやがて印刷されて辞典になるわけです)、その原稿カードが十数万枚ありました。あるいは20万枚あったかもしれませんがよくわかりません。これも接収されたわけです。

### 愛知大学の設立

同文書院の人たちは日本に帰ってきます。そのとき台湾にありました台北帝国大学、あるいは朝鮮、韓国にありました京城帝国大学、あるいは満州国とっていた中国の東北部にあった建国大学等々、それから天津には工業専門学校、大連にも高等専門学校がありましたが、それら中国、台湾、朝鮮にあった学校にいた教職員、学生、あるいは卒業生の人たちを、豊橋に一つの大学を作って収容しようということを計画したわけですね。ここで話が長く

なってしまうと、とても辞典のことにいけませんのでかいつまんで言いますが、こういうような寄せ集めの大学を作ろうとしたのが、〔南開大学での辞典座談会の写真を指して〕ここにはいないのですが、本間喜一というわが愛知大学の創始者の方です。この本間先生は同文書院大学の学長でした。最後の学長です。

これは本間先生が言っておられるのですが、廃校、学校をやめてしまうという場合に、その責任者の学長としてやるのが三つある。一つは在学生と教職員を全うする。学生を卒業させるということが入学させたものの責任だ、それから教職員は食ってかなきゃいかん、それには学校を作り教える場所を与える。これが一つです。二つ目は卒業生です。卒業生は同窓会というかたちで母校とつながりを持っている、それには同窓会の名簿を作らなきゃいかん、それによってネットワークを作ろう。三つ目は何かといいますと、この場合でいえば東亜同文書院大学ですが、大学の名誉、つまりその研究業績を世に知らしめなきゃいかん。何しろなくなってしまう学校ですから、かつてこういう学校があったということをきちっと世に示す必要がある。それだけの内容を持っているということです。本間先生はそれを愛知大学という名前で豊橋に作りました。

愛知大学は最初、教職員も同文書院の教員は3分の1ぐらいで、京城帝大とかその他が3分の1、それから日本の国内にいた大学教授が3分の1ぐらいでできるわけです。当初、本間先生たちは同文書院大学の復活を考えました。もう一回日本で同文書院のような大学を作りたいということで、つまり中国と貿易、通商を行って、双方がWin-Winの関係になる、これに資するような人材を作ろうというわけです。ところがこれはだめでした。なにぶん日本はアメリカ軍に占領されていて、中国といえばアメリカはかっとなってしまっていて、朝鮮で戦争をやるわけですね。中国が人民義勇軍というかたちで朝鮮に入ってきて北朝鮮を支援し、韓国のほうはアメリカが後押しをして、朝鮮戦争が起きました。実際は米中戦争が起ってしまったわけです。本間先生たちが考える中国に志を持つ通商、貿易をしようという人材を養成する学校は、アメリカからいえばとんでもない話です。アメリカは在日米軍と

いって、今と全く同じですが、軍事力を持っていてそういう声をつぶしていきました。現に愛知大学の教職員で軍事裁判にかけられそうになったという人もいます。容疑は何か。『人民日報』という当時中国共産党が出していた国営の機関紙、今でもありますが、日本で言えば官報みたいなものです。『人民日報』には政府の代弁といいたいまいしょうか、国の方針をきちんと伝えるという任務がありますので、それを見ている日本人は中国共産党と関係している、内通している、ということです。愛知大学も中国という名前を全部捨てて大学設立に成功します。

### 愛知大学の中国研究

例えば現在、愛知大学に国際問題研究所がありますが、当初は中国問題研究所であった。これはいけないということで、中国を国際に変えました。だから愛知大学でいう国際というのは実は中国と日本との関係という国際です。ちょうど東京にあります国際基督教大学、あの場合の国際というのは中国との国際ではないです。あれはアメリカと日本との国際です。だから基督教大学です。国際ということは何も共通する意味ではありません。グローバルでも何でもなし、これはその時々との関係です。愛知大学における国際うんぬんというのはすべて中国うんぬんでした。それは全部、先ほど言ったように米軍支配下ですから、日本の文部省も含めて中国はいけないということで国際という名前に変えました。ということで、愛知大学における中国研究というのは実は非常に屈折しているわけです。ストレートにずっときたわけでもありません。今言ったことは、つまり愛知大学は全く新しい大学として開設されたということです。

ところが華日辞典というのは、何回も言いますが、同文書院のスタッフが作ろうとした辞典です。その資料を本間学長が返してもらおうということになった。中国政府に没収されたものを返してもらおうということとはとんでもない話で、戦争に負けた国が何かを返してもらった例なんてありません。今、ロシアとの関係でやっている北方領土だって返してくれといっても、絶対返さないとですよ。台湾だってかつて日本は戦争に勝って取り上げたでしょ

う。それを返したのはいつですか。日本が負けたときです。領土とは違いますが、たかだか華日辞典、これでも敵の資産であるものを時の政府が返すはずはありません。そこで本間先生は、これは文化的なもので財産的なものではないと、要するに金目のものではないと、辞典の原稿は辞典ができて初めて価値を持つものであって、その辞典ができるかどうかわからない、だから辞典を完成させるからこれを返してくれと。よくぞ本間先生は考えられたと思います。鈴木先生は何と言っていたか。鈴木先生は私の中国語の先生でした。こうおっしゃっていました。自分たちは一生懸命に華日辞典を作ろうと思っていたが接収されたのだから仕方がないと、これは負けたのだからもうできないと。愛知大学にカードが返ってきて第一にスタッフがいない、金もない貧乏大学なのでとても返してくれというようなことを考えたこともない。しかし本間学長がかねがねこれは返してもらおうではないかと言われたから、それでは乗ってみようということになった。

#### 辞典原稿カードの接収と返還

なぜならば原稿カードを接収されたときに、当時接収委員（接収委員というのは同文書院の財産を没収する当時の中華民国政府の役人）として来たのが鄭振鐸という学者です。この方は現在の中華人民共和国の文部大臣になりますが、文学者としても、あるいは言語学者としても有名な方で、著作もたくさんあります。この方に「これは華日辞典の原稿だ。これは将来もし状況が許せば自分たちで完成したい」ということを鈴木先生がおっしゃったわけです。鈴木先生は中国語の先生で、相手が鄭振鐸という文学者、言語学者であり、その方が中華民国政府のお抱え役人として接収に来たということを知っていましたから、学者対学者ということで話を通じるのかどうかはわかりませんが、とにかくそういう希望を伝えていました。それが10年後になって、本間先生から言われて、かつて自分が鄭振鐸に言ったことの記憶がよみがえってきて、「それではやってみましょう」と手紙を出したところ、原稿が返ってきました。

そのときにこういう言い方をしていました。辞典原稿カードは敵産として

国民政府が、前の政権が接収した。それをわれわれ中華人民共和国は継承しているから返すというわけにはいかない。返すことはできないが、しかし中国人民から日本人民にプレゼントしよう、贈呈しよう、そういうかたちで返しますよと。ところがそれを受け取るほうの日本人民はいないわけです。皆さん、日本人民って誰だと思いませんか？ 日本国民はいますが、日本人民というのは法的には存在していません。

そこで考えたのが日本中国友好協会です。日本と中国との友好と親善のための協会を日本国民が作った。これはまさに人民の立場です。日本政府とは違います。その日本中国友好協会の創設者の一人が本間先生です。本間先生はこの協会を作るときの八人の発起人の中の一人でした。だから本間先生としてはこれを受け取る立場にある。一つは日本人民の立場に立っている、もう一つは同文書院の責任者、もとの所有者である、しかもその原著者である鈴木擇郎先生が愛知大学にいる、これは返してもらえると、商法学の権威である先生がおっしゃるのだったらいいだろうということでやってみた。これを基に始まったのがこの辞典です。

もう一つ言いたいことがあります。本間先生は愛知大学の創始者であり、同文書院大学の最後の学長ですが、その本間先生が実は愛知大学がこの辞典を作るのではないということをおっしゃってはいないが実践しています。

### 華日辞典刊行会の設置

それは辞典編纂を始めるにあたり華日辞典刊行会を立ち上げたことです。学校法人愛知大学ではないのです。華日辞典刊行会という法人格はありませんが、愛知大学の中に事務所を置く組織団体が辞典を作るわけです。愛知大学ではありません。資金はどうするかというと、自分たちで募金活動をしました。愛知大学は貧乏で、それは愛知大学学長でもある本間先生自身がよく知っています。貧乏大学で辞典編纂というおそれたことをする費用は出せない、学費から出すわけにはいかない、だからこれを寄付で集めようと。実際に寄付金集めをされるわけです。原著者である鈴木擇郎先生も同文書院と愛知大学の関係者です。かつ発行者である華日辞典刊行会のトップも同文書



院大学の学長であり、愛知大学学長です。にもかかわらず華日辞典刊行会がこの辞典を完成させ、そして出版をするのです。あまりにも膨大な内容で、例えば平凡社とか岩波書店とか三省堂とかいう大出版社ですら、売れないものは作れないと、結局、出版社がつきませんでした。当たり前です。やむを得ないと、華日辞典刊行会が活躍します。本間先生が出版費用を募ってきたのが、50年前の、ここにある『中日大辞典』です。だから言うならば、つまりこれが「編者から見た」ということですが、私はもう編者でも何でもないのですが、その側から見れば、この辞典は、本間先生、鈴木先生という同文書院の人たちが編集して、同文書院の資金で、その募金の相手も実は同文書院の卒業生の人たち、毎日新聞社長とかそうそうたるメンバーが財界にいたので、そういう人たちの協力を得て、募金をして、出版費用を作ってきたのです。その意味で言いますと、確かに愛知大学が出した辞典ですが、内実から言えばこれは同文書院が出した辞典ということになります。

もう一回繰り返し言いますと、辞典の内容は同文書院の華日辞典編纂委員会で作った原稿カードとは全く違います。カードは今から70年前の中国語ですから、それを現代に生かして使えるはずはありません。70年前の日本の国語辞典を今、例えば広辞苑が出していますか。できませんよ、それはもう70年前の言葉です。だからこの内容になっているのは愛知大学が作った辞典です。愛知大学が同文書院を継承するとか、何をどんなかたちで誰から継承するのかよくわかりませんが、そういう言葉よりも内実をよく見れば、私はこの辞典が一番初めにお話しした本間先生が三つやると言った、その最後ですね、つまり同文書院の業績を世に知らしめるという、その目的のために本間先生は、あるいは鈴木先生はされたのだろうと思います。ただ、それに舞台を与えたのは愛知大学です。だからその点、私は愛知大学の入学生で、愛知大学の卒業生で、同文書院と全然関係ない新制愛知大学の間で、愛知大学でこの辞典をお手伝いした編者の一人ですが、それでも今言ったようなことを、自分でも矛盾していますが感じています。愛知大学がなければ辞典はできなかつた。しかしそれ以上に同文書院がなければ、それはもうあり得ませんでした。



なお、この同文書院の業績のうち、中国を現地調査するということは、例えば愛知大学現代中国学部がそれを部分的ではありますが実践していますし、また ICCS 国際中国学研究センターという研究機関を通じて、愛知大学は中国の大学と提携して研究を進めています。これらも実はこの本間先生が考えた華日辞典刊行会の目的です。華日辞典刊行会の目的は二つ、一つは『中日大辞典』を出版すること、これは見事果たしました。二つはその利益を学校法人愛知大学は経常支出として使ってはならず、愛知大学が教職員、学生の中国との教育文化交流、教育研究交流のために使う基金にすること。それ以外に使ってはいけないと支出目的が限定されていました。

### 中日大辞典編纂所への移管

今はそうではありません。その後、(この辞典の初版以外は)学校法人愛知大学に属する中日大辞典編纂所が刊行しますので、2版、3版は全部愛知大学です。だから愛知大学のもので愛知大学がまさに出しているわけですが、初版はそうではないということです。この点について本間先生は非常に厳格におっしゃっていました。例えば、現在の愛知大学と中国との交流は全部愛知大学の資金、つまり学生諸君からの学費その他でまかなっているわけですが、70年前はそうではありません。これは辞典刊行会の、初版だけでも5、6万冊、その後、十数万冊が出ますが、その売上金です。それを元に例えば、このお話は今日はいしませんでしたが、1973年の南開大学での辞典座談会にもその費用で行きました。この座談会で鈴木先生から提案された愛知大学と中国の大学との、〔スクリーンの写真を指して〕これが南開大学ですが、この呼びかけが、<sup>こんにち</sup>今日の中国との交流の最初といたしますか、出発点だと私は思います。

同文書院の実学というのは、辞典もその一つです。辞典というのは、私たちの編者の方からすると、ある目的のために作ったわけです。使う皆さん方からすると、それを使って何かのために役立っている、工具、ツールです。工具書です。一般に辞典を作る側から言えば、これが完成してそれで終わりです。ただ、本間先生はさらにその売上を基金としてもう一つ高いところを

目指した。これが同文書院で言うところの実学です。実利を追うものだけではなくて、実学をしながら実は非常に深いところで哲学的で、伝統的な中国哲学といいたいでしょうか。

本間先生の言葉ではありませんが、根津一院長が同文書院の教育を行う目的についておっしゃっています。院長は同文書院を作った創始者の一人で、愛知大学では本間名誉学長に匹敵するような方です。力による武力、軍事力、あるいは金による財力、資本経済、そこから突っ走れば、日中間で必ず衝突が起こる。その衝突が起こるのを止めるのは知、愛知の知であり、知恵の知でもあり、つまり教育であると。そのために同文書院では実学、商学とか簿記学とか、あるいは中国語といった実践的な教育を行いながら、この根津院長が週に1回だけ講義をされました。四書五経という言葉がありますが、その四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）のうちの『大学』についてです。『大学』の中でも最も基本的といわれる「明明徳」という、明德、明らかな徳を明らかにするという内容です。晩年になると月に1回、さらには年に1回だけ講義をされました。七十近くで亡くなられ、たぶん当時はマイクもありませんから何を言っているかよくわからないのですが。これは必修科目です。ですから否応なしに、何のための学問かわからないけれど、その講義を受けて卒業するわけです。つまり非常に深いところでは、実学と、虚学といえますか哲学を一緒にしたようなものの考え方です。先ほど言った武力と財力を統御するものは知であり、同時に徳であるという、このことが、本間先生も考えられた、華日辞典刊行会が辞書を出すだけではなくてその利益を中国との教育交流に使おうということに通じるのであろうと思います。

今日は「編者から見る」ということでしたが、編著者といいますと鈴木擇郎先生ですが、私はあえて辞典を世に出したということでは本間喜一と鈴木擇郎というお二人の名前ははずせないだろうと思いました。誠に何を言ったかわかりませんが、原稿をきちんと書いてこなければいけなかったのですが、若いときからもう（笑）、こういうことで申し訳ありません。以上で話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。